

みやこ子ども土曜塾

学部長の手帖から

西岡 正子

謹賀新年。手帖に書かれた仕事を見る限り二〇〇六年に到達出来ているかどうか自信はない。まだ、私だけ仕事を抱えて、年を越せないでいるかも知れない。忙しい秋を何とか乗り切ったのだから、この冬を乗り越え春までには何とか追いつけるはず。文化の秋は、講演会、シンポジウムが目白押しであった。教育学部が関わり佛教大学で開催されたシンポジウムだけでも、學術協定を締結しているハワイ大学の研究者との「佛教大学・ハワイ大学學術会議」、京都府の山田知事の講義と教育学部学生とのディスカッション「京都府の未来と若者への期待—人間・教育・社会」、教員養成GP採択記念シンポジウム「公立学校を起点とする小大連携プロジェクト」がある。

大学以外でも教育学部が関わるシンポジウムが多く開かれた。その中の一つに11月11日に実施された第31回日本PTA近畿ブロック研究大会がある。京都市勤業会館（みやこめッセ）で「やればできる みんなおきばりやす〜京から明日へ〜」のスローガンのもと近畿ブロックのPTA会員3,000人が集まり情報交換が行われた。特別分科会は、「みやこ子ども土曜塾の挑戦〜まち全体を学びと育ちの場に〜」というテーマで実施された。京都市のホームページには『「大人みんなが先生に」を合言葉に、

「まち全体を学びと育ちの場に」を目標に、土曜日ははじめ学校休業日に京都ならではの多様な学習資源を生かしたさまざまな学びの場を提供し、子どもたちを育んでいこうという市民ぐるみの取り組み、それが「みやこ子ども土曜塾」です。みやこ子ども土曜塾が始まって1年が経ちました。平成16年度10月以来、様々な分野から多くの団体や市民ボランティアのご協力のもと、約3,300事業が計画され、延べ10万人の子どもたちや保護者の皆さんに参加していただき、学びと育ちの輪が広がっています」と。

特別分科会のパネルリストには、粘土の人形を動かしてアニメを作るクレイアニメ教室実施のNTTの社員、神道・雅楽教室の上賀茂神社の宮司さん等がおられた。我が佛教大学は、オープニングのよさこい踊りの披露（佛教大学よさこい踊りサークル紫踊屋は第4日曜日に地域の大人と子ども達に佛大多目的ホールで土曜塾を実施）に始まり、私の基調講演、パネルディスカッションでは、教育学部4回生で京都市社会教育委員をつとめる関口君が教育学部土曜塾の内容を発表した。教育学部は各ゼミごとにもパソコン、シャボン玉作り、絵本作り等の教室を第三土曜日に開いてきた。企画から準備、実施に至るまで全て学生が行い、見事に子ども達を指導し、毎回見学に来ら

れる教育委員会の方々から高い評価を得ている。私もコメンテーターとしてパネルディスカッションに参加。多くの保護者は佛教大学の教育と学生の日々の活動に感心してくださった。

みやこ子ども土曜塾は、京都の歴史と深い繋がりがある。京都は明治5年の学制公布以前の明治2年に町衆が自らの力で64の番組小学校を開校した。番組は10ほどの町が集まったものである。町は通りを挟んで両側が一つとなり作られたもので、町式目の制定、所司代や町奉行からの御触の伝達、町の問題を協議する自治組織であった。町組自治の場は町会所であり、この会所は町衆の学習の場でもあり子ども達の教育の場でもあった。ここで教えられていた「使用謡」には「丸竹夷二押御池（丸太町通、竹屋町通、夷川通、二条通、押小路通、御池通）：」と今日でも歌われている「京の通り名唄」の「九重」や、九九等の算術を謡う「竹弄」、日本の国名を謡にした「秋津国」、針灸術のつばの心得「十四経」等がある。

みやこ子ども土曜塾は町会所の歴史を汲むものである。京都にある大学として今年度もより充実した学びの場を地域に提供していきたい。できれば佛教大学ならではの土曜塾を、それは何だろうか。